

Culture in Psychiatry



カミュの『異邦人』

高橋 正雄 筑波大学名誉教授

1942年にカミュ (1913-1960) が発表した『異邦人』(窪田啓作 訳, 新潮社)は20世紀を代表する小説の1つとされているが、『異邦人』には、パーソナリティ障害や発達障害的な特性をもつ人間を擁護する作品という側面もあるように思われる。

周囲から「口数が少なく、内に閉じこもり勝ちな性格」とみられていた主人公ムルソーの人となりについては、養老院に預けていた母親が亡くなったときの態度が、彼がアラビア人を射殺した事件をめぐる裁判の場でも問題視される。

たとえば、予審判事は母親を埋葬する日にムルソーが「感動を示さなかった」ことに注目しているほか、証人として呼ばれた養老院の院長も、「埋葬の日このひとがいかにも冷静だったのは驚いた」と語る。

それに対して裁判長が、「冷静とはどういう意味なのか」と問うと、院長はムルソーが母親の顔を見ようとしなかったことや1度も涙をみせなかったこと、埋葬が済むと母親の墓に黙禱もせず立ち去ったことなどを証言した。また、ムルソーが母親の年齢を知らなかった

ことにも驚いたと付け加えた。

次に証言台に立った門衛は、ムルソーが母親の顔を見ながらなかったことや、母親の遺体を前にして煙草を吸ったりミルク・コーヒーを飲んだりしたことなどを証言した。もっとも、ミルク・コーヒーは門衛から勧めたものだったのだが、それに対して検事は「他人ならばコーヒーをすすめて差支えない、しかし、息子の方は、生命を授けてくれた母親の屍を前にしては、それを断るべきだ」と、糾弾するのだった。

こうした裁判の状況をみたムルソーは、「これらのひとたちにどれほど自分が憎まれているか」を感じ、この時はじめて「自分が罪人だということを理解した」のである。

その後、被告側の証人として呼ばれたムルソーの友人セレストは、思うような供述ができなかったものの、退廷するときにムルソーのほうを振り返って、「これ以上何か自分にできることはないか」と問いかけるような様子をしたため、ムルソーは「生まれてはじめて、一人の男を抱きしめたい、と思った」という。

次に呼ばれたムルソーの恋人マリイ

は、母親の死の翌日のムルソーの行動を証言したが、それを聞いた検事はいかにも深刻な様子で「母の死の翌日、この男は、海水浴へゆき、不真面目な関係をはじめ、喜劇映画を見に行き行って笑いこぼれたのです」と言った。それを聞いたマリイは、声をあげて泣き出し、「それはほんとうではないのだ、別のこともあった、自分が考えていたこととは反対のことをいわせられてしまったのだ、自分はこのひとのことをよく知っている、あのひとは何も悪いことをしてはいないのだ」と抗弁したが、裁判長に合図された廷丁が彼女を連れ去った。

その後、友人のマソンもムルソーのことを「あれは律儀な男だ、あえていうなら、誠実な男だ」と証言し、近所に住むサラmano老人もムルソーが犬の件で親切だったことなどを証言したが、こうしたムルソーに有利な証言はほとんど誰も聞いていなかった。

これらの証言のあと、検事はムルソーが母親の死に際して感動を示さなかったこと、母親の年齢を知らなかったこと、母親の死の翌日に女と海水浴に行ったこと、喜劇映画をみてから女を部屋に連れて帰ったことなどを指摘し、